

## 日本歴史地理学会と吉田東伍 上

廣 木 尚

本稿の目的は一八九九年に設立された日本歴史地理学会（一九〇六年までは日本歴史地理研究会）の活動を跡付け、それを通じて、二〇世紀初頭の歴史学界におけるアカデミズム史学と在野の歴史研究者たちとの関係性を探ることにあ  
る。その際、本稿では特に創立以来、同会の要職を占め、その死の間際まで中心的メンバーとして活動した吉田東伍  
（一八六四～一九一八）に注目する。この作業を通じて、日本歴史地理学会の活動と個々の研究者の業績との相互関係  
を解明したい。

日本歴史地理学会については、地方史研究や史蹟保存の領域に近代歴史学の方法を広め、活性化させた啓発的役割  
が明らかにされる一方、一九二〇年代以降、考古学や人類学、民俗学等の隆盛に伴い衰退していったことが指摘され  
ている。<sup>①②</sup> また、「歴史地理学」を冠しながら、同会の活動がその後の地理学の発展に寄与するところは少なかったと  
もされる。<sup>③</sup> そこからは、二〇世紀初頭、アカデミズム史学と在野の歴史研究者とを繋ぐ媒体として一定の影響を持  
ちながらも、学問的な独自性は限定的であった同会の姿が浮かび上がる。

他方、筆者はかつて帝国大学を中心とするアカデミズム史学の自立化過程を辿る中で、同会が果たした役割を位置づけた。アカデミズム史学が自立するためには、古文書や歴史地理学的知見といった〈史料〉の蓄積が必要とされたが、全国に遍在する膨大な〈史料〉を収集・蓄積するのは、アカデミズム史学の学者だけでは困難であり、アカデミズム史学の外側にいる在野の歴史研究者の協力が求められた。そして、この両者の協力関係を築くための媒体として設立されたのが日本歴史地理学会であつたとの見立てである<sup>(4)</sup>。

この見立てに従えば、日本歴史地理学会の地方史研究や史蹟保存活動への積極的なコミットメントは、アカデミズム史学による啓発活動であると同時に、何よりもアカデミズム史学自体の確立を目指した活動だったのであり、そこに冠された「歴史地理学」も、〈史料〉を収集・整理・分析するための「補助学」としてのそれであつたということになる<sup>(5)</sup>。したがって、本稿では日本歴史地理学会をアカデミズム史学の自立化のために、アカデミズム史学と在野の歴史研究者とを媒介した団体と把握し、この観点から同会の活動を跡づける。

ただし、右の問題設定は、同会の実践をアカデミズム史学一般の中に解消するものではない。本論で詳述するように、雑誌の発行や講演活動など、アカデミズム史学と在野の歴史研究者との間に多様な接点を提供した日本歴史地理学会は、結果的に、両者の問題意識や主体性が交錯する境界域を現出せしめた。そこには、アカデミズム史学が在野の歴史研究者を啓発・指導するという一方的関係だけではない、双方向性を見出すことができる。この点に留意し、本稿では、両者の連携の内実に踏み込むことで、日本歴史地理学会という境界域の相対的独自性を見出したい。

右の観点に立った時、重要な対象として浮かび上がるのが吉田東伍である。周知のように、新潟学校中学部を中退して以降、正規の教育を受けることなく独学で学問形成を果たした吉田は、官学アカデミズム史学と異なる学風を築いた在野史学の代表格と評価されてきた<sup>(6)</sup>。他方、後述するように日本歴史地理学会にあって吉田は、創立以来、賛成

員や顧問をつとめ終始指導的立場にあるとともに、会誌『歴史地理』に数多くの論稿を掲載し、一時は同誌の編集を担当するなど、実務面でも深く関与した。「在野」に根を持ちながら学会の指導的立場にあった吉田は日本歴史地理学会の相対的独自性を体现する存在ともいえる。また、吉田は、一九〇一年、創設もない東京専門学校史学科の講師に就任して以来、同校で研究・教育に従事した。日本歴史地理学会での吉田の活動を跡づけることは、草創期の『早稲田史学』の特徴を側面から解明することにも繋がるだろう。

以下、第一節では一九一〇～二〇年代の日本歴史地理学会の活動を、主に在野の歴史研究者との接点に注目して跡づける。その上で、第二節では同会における吉田東伍の活動を取り上げ、その具体像に迫りたい。

なお、本稿で扱う主な史料は、日本歴史地理学会の会誌『歴史地理』である。『歴史地理』は一九九九年一〇月に創刊されると、翌年三月まで第一巻（一～六号）、一二月まで第二巻（一～九号）が刊行され、一九〇一年から一九〇六年の間は年一巻、各一二号のスケジュールで第八巻までが刊行されている。一九〇七年の第九巻以降は毎年二巻各六号の刊行スケジュールで安定した。以下、本稿では『歴史地理』からの引用は『歴史地理』第一巻第一号」は「一―一」等と記し、刊行年は省略する。

# 1. 一九〇〇～一〇年代の日本歴史地理学会<sup>(7)</sup>

## 設立の経緯

一八九九年四月二七日、日本歴史地理学会の前身にあたる日本歴史地理研究会が設立された。发起人は、大森金五郎（一八九四年・東京帝大国史科卒）、岡部精一（同上）、喜田貞吉（一八九六年・同国史科卒）、原秀四郎（一八九八年・同国

史科卒)、星野日子四郎(一八九九年・同国史科卒)、栗田淳綱(一九〇〇年・同国史科卒)、堀田璋左右(一九〇一年・同国史科卒)、藤田明(同上)、小林庄次郎(同上)、熊谷直一郎(一八九四年・国学院卒)の十名、熊谷以外は全て東京帝大国史科の出身者と在学生で「元氣な若手の熱心家揃ひ」(喜田貞吉)であった。

發起人の一人、堀田璋左右によれば、同会設立の発端は前年一二月、堀田ら在学生が鎌倉の杜寺に古文書見学に赴いた際、同行した大学院生の喜田貞吉が「歴史地理学の研究団体」の設立を持ちかけたことにはじまるという。喜田は、当時、大学院で東北地方の歴史地理を専攻していた原秀四郎とも計画を練っていたといい、發起人の人選も喜田によるものだったらしい。最初の会合は堀田が下宿する池之端、慶安寺の座敷に、東京帝大国史科の学生を中心に会員約三〇名が集まって行われた。また、同会の規約四条では「学識名望ある人士を賛成員に推薦す」とあり、設立に際して「会を指導して下さる先輩諸氏や、物質的に会を援助して下さる知名の方々」(喜田)二〇名が賛成員となった。

規約第一条では、同会は「本邦歴史地理の研究に従事するもの」とされ、日本の歴史地理がフィールドに設定された。具体的には、「一、古跡 旧都社寺陵墓古城跡古戦場名所等」「二、地勢の変遷 河川海岸山腹等の変動」「三、古今の地理上の智識 地誌紀行地図等」「四、政治地理 国郡郷里領邑の境界、都市宿駅道路津済の変遷、人口の増減、産物の沿革、地理と文明との関係」の「研究綱目」が挙げられている。また、第六条では、談話会、大会、旅行、歴史地理に関する資料・図書等の出版といった活動内容が記載され、第七条では会誌『歴史地理』を発行し、会員に頒布するとされた。

『歴史地理』は一八九九年十月に創刊された。当初の発行元は發起人の一人、岡部精一が懇意にしていた書肆・六盟館が請け負っている。<sup>(8)</sup> 創刊号はわずか三六頁の小冊子だったが、評判は上々で、「第一号は五版を重ねて正味五千部を売り尽くして残部がなく、二号が三版、三号が再版というトン／＼拍子で、同人の意気大に揚つた」(喜田)と

いう。翌年四月の第二巻からは毎号八〇頁に紙面も増やし、発行部数も当初ほどではないものの、毎号二〇〇〇部程度があったという。

また、活動資金獲得のため、雑誌発行と合わせて、「歴史地理叢書」の刊行を企画、一九〇〇年の一年間に『古戦場』『古戦場 続編』『名蹟詩史』『名蹟巡錫記』の四書を刊行した。これらは堀田が編纂を担い、喜田、藤田、堀田が分担して起稿したものという。会は順調に発展し、第二巻の時点で会員数三四二人<sup>⑨</sup>、賛成員は四一人を数えた。

### 「地方」への呼びかけ

このように日本歴史地理研究会の発足は一般に好感を持って迎えられた。『歴史地理』創刊号の五千部という部数は、同誌が高等教育機関の外に多くの読者を獲得したことをものがたっている。事実、会員だけに限っても、先に挙げた三四二人のうち、相当数が初等・中等教員を中心とする地方在住者だった。

彼らにアプローチすることは、日本歴史地理研究会設立の主要な狙いだった。創刊号に掲載された「日本歴史地理研究会設立趣意書」には次のようにある。

地理の研究は決して徒に机上図を按してのみ為し得べきにあらず、必ずや实地踏査を経て初て其实を挙るを得べきなり、然れども少数の人いかでか天下到る処の山川を跋涉するの便と時とを有せん、必ず其地に生れ、其地に長じ、其地理に熟すること最も深き、各地方篤学の士の補助を得ざるべからず、是故に今本会設立の初に当り、其本意を吐露して、広く各地同好の諸彦の賛助を乞はんとす

趣意書は「歴史と地理と離る可らざるの理」を説き、歴史地理の研究に「实地踏査」が欠かせないとした上で、

「其地に生れ、其地に長じ、其地理に熟すること最も深き、地方篤学の士の補助」を求めている。ここでは「各地方篤学の士」は受動的な会誌の読者ではなく、「少数」の専門家とともに歴史地理の研究に従事する協力者と位置づけられている。

留意すべきは、こうした課題意識は、日本歴史地理研究会の設立以前から帝国大学を拠点とするアカデミズム史学の中で継続的に説かれていたものだったということである。

草創期の帝国大学史学科を主導した御雇外国人ルートヴィヒ・リースは「日本歴史二関スル材料ノ蒐集ハ、現今日本ニ於テ諸史学会家ノ為ス可キ急務」とし、創刊まもない『史学会雑誌』（のちの『史学雑誌』）を史料収集という「急務」に活用することを説いた。帝国大学臨時編年史編纂掛が行っている史料収集活動や収集史料の情報を『史学会雑誌』を通じて「天下ノ学者」に知らせ、新出史料の発見例や収集史料の価値を周知することで、「天下ノ学者」による自発的な探索を促し、史料収集の円滑化をはかろうというのである。<sup>10</sup>リースが歴史学徒が修めるべき「学科」として、古文書学や「日本ノ貨幣学印章学系図学」等とともに「日本ノ史学的地理学」を挙げていたことを踏まえるなら、彼のいう「日本歴史二関スル材料」に歴史地理学的知見が含まれることは明らかである。

この後、一八九五年の奥羽史学会、一八九六年の北陸史談会、一八九七年の九州史談会と各地で「地方史学会」が組織された。<sup>12</sup>これらの学会は、奥羽史学会は第二高等学校、北陸史談会は第四高等学校、九州史談会は第五高等学校というように各地の高等学校に拠点を置き、小川銀次郎（一八九一年・史学科卒）、本多浅治郎（一八九三年・史学科卒）、浦井鏗一郎（一八九二年・史学科卒）、武藤虎太（一八九五年・国史科卒）ら高等学校に赴任した帝大史学科・国史科出身教員の指導の下、主な会員には高等学校や中学校の学生、師範学校関係者、初等・中等教員らを擁した。

右の「地方史学会」はリースの構想に呼応するように、いずれも規約で所在地の史料収集を主要な活動内容とする

ことを謳った。この活動を東京の史学会も歓迎し、「古文書の蒐集調査」「桑海の変」「河川の遷転」「古来」の「地名」といった「地方地理の踏査、地方伝説の蒐集」、それらを集成した「地方史誌の編纂」など、在住地に関する歴史地理学的知見や古文書の集積を「地方史家」が率先して行うよう呼び掛けた。いずれもアカデミズム史学の確立にとって不可欠でありながら、現地を遠く離れた東京の「中央史壇」には困難な作業だった。<sup>(13)</sup>

もっとも、「地方史学会」の活動はほどなくして行き止まった。指導的教員の転任や会務を担った学生の卒業等で組織の継続性を保てなくなったことがその原因と思われる。活動の停滞を危ぶみ激励する論説が『史学雑誌』に掲載される中で、「中央史壇」の若手研究者たちによって結成されたのが日本歴史地理研究会だった。

以上のように、日本歴史地理研究会の活動は、「地方史家」を糾合した〈史料〉の収集・蓄積と、それを通じたアカデミズム史学の確立という、草創期以来のアカデミズム史学の活動の延長上に位置づけられるものである。また、同会の発起人のうち、喜田貞吉と並んで当初の会務・編集に尽力した小林庄次郎と藤田明は、いずれも第五高等学校時代、九州史談会の会員として活動した経験を有していた。<sup>(14)</sup> 一九〇〇年四月から二年弱の間、『歴史地理』の編集を担当した小林は、「麻郷」の筆名で多くの論説を執筆し、初期の議論をリードした。一九〇三年八月に編集主任に就任し一九〇五年の年末までつとめた藤田は、「終始熱心な幹部として、常に縁の下の力持を平気でやられる様な有徳者」(喜田貞吉)とされ、「多年本会の幹部として最も尽瘁」(大森金五郎)した功労者だった。史学会の呼びかけに応え「地方史学会」が組織され、「地方史学会」の担い手が、長じて日本歴史地理研究会の発起人となるという繋がりをここに見出すことができる。小林、藤田のように高等学校時代から学会活動の経験を積んだ人物を実務担当者に擁した点に、日本歴史地理研究会が順調な滑り出しをみせた一つの要因を求めることができよう。

## 動く歴史学者たち

創立に際し「地方篤学の士の補助」を訴えた日本歴史地理研究会だが、「中央」の歴史学者たちも待ちの姿勢に終始していたわけではもちろんない。彼らが在野の歴史研究者に向けて行った啓発的活動については後述するが、何よりも彼ら自身が、能う限り実地を踏査し、史料を渉猟し、在野の篤学者と接する機会を持つとした。「歴史地理」の彙報欄には、毎号、会員の動静が報じられているが、そこには同会幹部たちがフットワーク軽く全国各地に出張する様子が伝えられている。

たとえば、早い時期の例として、三巻八号には夏期休暇を利用して、会員の瀬川秀雄が中国地方、原秀四郎が東北地方と、それぞれのフィールドへ実地踏査に赴いたことが報じられている（「専門学者の歴史地理実地踏査」。このうち瀬川の成果は、後に「吉川経家の最後及び其墳墓」（四—一・二）、「伯耆国の古城趾及史蹟」（五—一・二）等の論稿となつて『歴史地理』誌上に掲載された。このように、出張調査に赴き、ある場合は月々の例会で口頭による成果報告を行い、最終的に原稿化して『歴史地理』に掲載するというサイクルが定型となつて、多くの〈史料〉が収集され、共有されていった。なお、瀬川秀雄は右の実地踏査から間もない一九〇二年、中国地方史の研究で、原秀四郎は一九〇五年、東北地方に関する歴史地理学研究でそれぞれ文学博士の学位を取得している。

そもそも帝国大学の国史科・史学科では、学生が長期休暇を利用して史料収集や古蹟の踏査といった「修学旅行」を行うことが奨励されていた。<sup>(16)</sup> 麻郷「文科大学国史科生の歴史地理実地踏査」（三—二）が報じているのは、一九〇〇年の年末から年始にかけて、当時はまだ学生だった小林庄次郎と藤田明が、浜田廉ら同級生と五人で行った東海地方への修学旅行の事例である。星野恒、三上参次、田中義成という教授・助教授の指導の下、藤田と小林で旅程を組み実施したものという。<sup>(17)</sup> この修学旅行の報告書は藤田によるものとされ、<sup>(18)</sup> 「国史科第三年生修学旅行日記」として『史



学雑誌』(二二・三六・一〇、一九〇一年)に掲載されている。同時期の『歴史地理』に、華峰「反射炉と江川太郎左エ門」(三一・一)、右京生「鎌倉時代の東海道」(三一・三)、<sup>19)</sup>浮嶋生「箱根山道」(同)と、文科大学生と思われる筆者からの短編が複数掲載されているのも、おそらく、この旅行の産物であろう。日本歴史地理研究会の創立メンバーは、いずれもまだ駆け出しの若手研究者であり、自らも実地踏査の経験を積みながら、その記録を誌面を通じて共有し、会員全体の知識の向上をはかっていたのだといえる。その点で、初期の『歴史地理』に掲載された、星野恒「京都府和歌山県出張日記」(四・四・七・一一・一二)、田中義成「採訪逸話」(六・一・一七)など、修史局以来の経験豊富な研究者による調査報告は、彼らにとっても重要な学習材料となったことだろう。

五卷一〇号からは特に「旅行日記」の欄が設けられ、「洋の東西を問はず、世の古今を論ぜず」歴史地理の研究に資すると思われる旅行日記や紀行文等を掲載した。また、六巻から設けられた「談叢」には旅行上の失敗談なども掲載されている。調査地での宿屋の選択方法を記した「宿屋のはなし」(六・一二)など、こうした欄を利用して、研究に直接関わらなくとも実地踏査には欠かせない知恵が、時にくだけた文体で紹介された。

こうした事例の積み重ねの中から、より高い水準の研究成果も生み出されるようになる。三浦周行「歴史地理の探究材料としての阿津賀志山」(七・一・二)は鎌倉幕府による奥州合戦を対象とした論稿だが、この中で三浦は、吾妻鏡等、基本史料の知識に加え、現地の協力者を通じて「旧記を一覧し、地方の口碑を聴取り、遠近の地勢」を実見するといった調査を行って、「記録の研究」と「実地の踏査」を総合した歴史地理学的考察を試みた。

幹部会員による実地調査の成果として、学会活動への影響力の点でも特筆されるのが、一九〇二年の夏期休業中に大森金五郎が行った鎌倉、稲村ヶ崎の徒渉である。新田義貞が鎌倉攻略に際し、太刀を稲村ヶ崎の海に投じて侵入路を得たという『太平記』の有名な伝説を、大森は干潮時に自ら徒渉することで裏付けてみせたのだった(大森「稲村

崎の徒渉」四―一二。この試みは会員による実地踏査の端緒にして模範例として後年まで語り継がれることとなった。大森自身、この経験を講演会の定番の題目として繰り返し取り上げているが（大森「歴史地理研究の一例として稲村ヶ崎の探検談」〔八―八〕等）、それだけでなく、この後、鎌倉や神奈川県方面に関係する企画が持ち上がった際は、大抵、大森がその中心に名を連ねることになった。次項でみるように、一九〇八年に始まり日本歴史地理学会の恒例企画となった夏期講演会は、このような会員と地域との関係の中で具体化したのである。

### 夏期講演会の開催

『歴史地理』と並んで、会員の交流の場となったのが、夏期講演会に代表される講演会等の催しである。創立時にはじまった例会に続いて、一九〇〇年からは一般の聴講者を対象とする通俗講演会が始まった。第一回通俗講演会は、大槻文彦・三上参次・喜田貞吉・岡部精一を講師に、本郷湯島の麟祥院で開催され、約三〇〇人がつめかけた〔「歴史地理通俗講演会」〔三―四〕、「日本歴史地理研究会第一回通俗講演会」〔三―五〕〕。

さらに、会名を日本歴史地理学会に変更した一九〇六年には、地方への研究旅行も始まった。第一回目の行先は埼玉県川越周辺である。川越は、以前から喜田貞吉、堀田璋左右、藤田明が調査に訪れ、堀田璋左右「河越城及び喜多院」〔二―七〕で史蹟を紹介するなど、会員にとって土地勘のある地域だった。研究旅行の内容は、喜多院、久米川の古跡のフィールドワーク、川越中学校での大森金五郎の講演、幻燈会の開催等からなり、調査と啓発活動を兼ねたものだった〔「本会通俗講談及び実地踏査会」〔八―七〕〕。第二回の研究旅行は、千葉県の成田・香取地方で行われ、やはり喜田貞吉の講演会、幻燈会、香取神宮や伊能忠敬の旧邸への訪問という内容だった（青眠「成田及香取遠征記」〔八―一二〕<sup>(21)</sup>）。

このように一般の聴講者を対象とする講演活動と、実地踏査の蓄積の上に企画されたのが夏期講演会である。以<sup>(22)</sup>

下、鎌倉で開催された第一回夏期講演会を中心に、その内容を確認したい。<sup>(2)</sup>

記念すべき第一回夏期講演会の会場に鎌倉が選ばれたのは、「武家政治策源地の地」としての鎌倉の歴史的重要性はもちろんだが、日本歴史地理学会側の担当者として、地元を受け入れ態勢という実的条件が揃っていたからでもある。この企画はもともと、一九〇七年、委員の堀田璋左右と、鎌倉在住の会員で、覚園寺住職の釈靈巖との間で持ち上がったものだったという。堀田と釈は鎌倉での実地踏査を通じて以前から交流があった(『本会記事』(三一)一)。

ただ、この時は「我会の鎌倉通」である大森金五郎が樺太視察で不在だったこともあり、大森の帰京を待って、翌一九〇八年、改めて開催されることとなった。日本歴史地理学会の側では、大森を中心に、堀田と藤田明が地元との交渉にあたり、鎌倉側では釈靈巖をはじめ、鎌倉町長、鎌倉女学校、鎌倉保勝会のほか、寺院や医師など官民の組織・人士が協力を買って出た。

このような準備を経て開催に至った第一回夏期講演会は一九〇八年八月六日～一六日までの一日間にわたって行われた。その内容は、当時流行の「ユニヴァーシティー、エક્シテンションの形」をとり、「一面には歴史地理学実地指導いは、医学上臨床講義の形」をも兼ねるというもので、鎌倉女学校を会場とする総勢二五名の講師による連続講演と、現地のフィールドワークによって構成されていた。

連続講演会の講師と演題は、順に岡部精一「国史上世史」、小杉樞郎「鎌倉時代の風俗」、阿部秀助「人文史上に於ける都市」、平子鐸嶺「鎌倉時代の美術」、坪井九馬三「鎌倉時代に於ける胆沢街道」、三浦周行「鎌倉幕府の財政」、上田万年「鎌倉時代の言語」、藤田明「国史中世史」、重野安繹「我が国家と鎌倉幕府」、山上万次郎「鎌倉の地形と地質」、菅原寿仙「禅話」、芳賀矢一「鎌倉時代の文学」、星野恒「頼朝拳兵の名義に就て」、鷺尾順敬「鎌倉時代の仏教」、久米邦武「鎌倉時代の武士道」、三上参次「没後の楠木正成」、山根正次「海水浴と衛生」、大森金五郎「国史近

世史」、吉田東伍「鎌倉時代の莊園制度」、幣原坦「間島とは何ぞや」、白石正邦「鎌倉時代の教育」、坪井正五郎「鎌倉にて発見せられたる埴輪」、喜田貞吉「普通教育上の歴史」、岡部精一「鎌倉時代の女性」、喜田貞吉「歴史地理学」で、主要な講師は会員の中から選ばれ、演題の多くは地元鎌倉に因んだものだった。また、フィールドワークは、大森金五郎の十八番ともいえる新田義貞鎌倉討入に関する馬上講演と、やはり大森の案内のもと、二四〇名の参加者が二〇艘の船に分乗して行われた稲村ヶ崎廻航などであった。

第一回夏期講演会は、青森から鹿児島まで一八〇名の会員を集める盛況となった。もっとも、初の催しということもあり、経費や人手は不足し、会幹部が自ら雑務に奔走するなど運営は混乱を極めたらしい。下足番の青年がフロックコートを着て演壇に立った際には、聴衆は驚き恐縮したという（喜田貞吉）。

ともあれ、夏期講演会という試みが好評を博したことは、その後、講演の内、鎌倉時代史及び鎌倉の地に関係あるものを選んで『鎌倉文明史論』（二九〇九年）が編まれたことや、翌年以降、夏期講演会が恒例行事として定着していったことからわかる。

第二回夏期講習会は翌年八月、小田原で開催された。この時は、遠く北海道や沖縄、朝鮮を含む三三七人の参加者が集まり、更なる盛況となった。出席者の内訳は、小学教員一七六人、中学教員二三人、女学校教員一五人、学生三人等となっており、男女別では男性三一五人、女性二二人という構成だったことが記録されている。石垣山上での歩兵少佐・大内義一による豊臣秀吉の小田原攻めに関する講話には、小田原滞在中の山県有朋が訪れ、「暑気に拘らず熱心に耳を傾け」た<sup>(2)</sup>。また、閉会式にはやはり国府津の別荘に滞在中の大隈重信が演説をするなど、華やかな催しとなった（以上、「第二回夏期講演会記事」（二四一三三）。なお、この講演会についても、後に『戦国時代史論』（二九一〇年）が刊行されている。

この後、夏期講習会は長府（山口）、大津（滋賀）、太田（群馬）、葦山（静岡）、東京、奈良、屋島（香川）、平泉（岩手）、豊橋（愛知）、米子（鳥取）、神戸と続いた（大津・太田、奈良・屋島、米子・神戸は同年の開催）。参加者は交通の便の悪い葦山や太田でも二〇〇人以上が集まり、奈良のように多い場合は八〇〇人以上の申し込みがあったという。参加者内訳は共通して半数前後を小学教員が占めた。第二回以降の開催地は、多くの場合、地元からの招聘によつて決まった。地元教育会等、地域の側が主催を引き受けることも増え、運営に関する日本歴史地理学会の負担は減つていったと思われる。また、長府の講演会の記録が『日本海上史論』（一九一一年）、葦山が『伊豆半島』（一九一四年）、奈良が『奈良時代史論』（一九一三年）、東京が『江戸時代史論』（一九一五年）等、講演集の刊行も続いた。

### 「郷土史」への期待と批判

このように一九〇〇～一〇年代、日本歴史地理学会は雑誌や講演会等の媒体を用い、初等教員を中心とする在野の歴史研究者たちとの交流を図つていった。その主要な動機が〈史料〉の収集・蓄積のため、「地方篤学の士の補助」を得るためであつたことは先述の通りである。創刊当初、『歴史地理』の編集を担当した小林庄次郎によれば、「地方在住者より研究の報告資料を得」「現今学界の欠点を補はんとする」ため、『歴史地理』は「徒らに高尚を衒はず。広く衆説を聞かんことを欲し。学園の如きは眼中になく。門戸を開て熱心なる同志を歓迎せん」との編集方針をとつていた（麻郷「明治三十三年の歴史地理会」〔三一〕）。

では、そこにいう「学界の欠点」とは何か。小林によれば、それは「歴史及び地理の真正正確なる智識の欠乏」である（麻郷「歴史及び地理の正確なる知識」〔二九〕）。「天下到る所として歴史あらざるはなし、民衆百万の首都も、いふせき賤の伏屋の寒村も、其国民生活の舞台たるに於て多く軽重あることなきなり」なのであり、したがって、歴史

の「其の眞の動力は全国にある」。それにもかかわらず、「古来史家都會の地を偏重して、地方僻遠の地の發達の如きは多く注意せず」というところに問題があつた（麻郷「郷土史の研究」二一八）。

ここには、非文字史料としての「歴史地理」という史料論的觀點とは別に、「都會」「首都」に「地方」ないしは「全国」を對置する空間論的觀點を読み取ることができる。文献史料のみで歴史の実像に迫るのが困難であるのと同じく、「首都」や「都會」だけをみていては歴史の「眞の動力」は解明できないのである。小林は、そこに現在における「郷土史の価値」を見出し、「郷土史」に「最も多く此の研究の便宜を有せらるゝは地方在住の史家なるべきなり」として、「諸士固より自己の研究問題を有せらるべしと雖、吾人は又其余暇の十（分の）一を割て其在住地方の史に心を潜められんこと切望に堪へず」「吾人は諸士を煩すに非ざれば郷土史研究の功遂に成り難きを恐る」と懇請したのである（同右）。

それゆゑ、小林は「地方にては諸方の史談会減びたるにや聞として声なく」と、かつて自らも関わつた「地方史学会」の停滯を嘆き、また、現状の「郷土史」の実態が、「多くに杜撰淺薄」で「特に其材料の選択の道を知らざるもの多し」という状況にあることを憂えて、「史料の何たるかを弁知せしむるの道を設けざるべからず」とした（麻郷「明治三十三年の歴史地理界」三三一）。喜田貞吉による下総の公家塚と小御門神社に対する批判や、次節で取り上げる吉田東伍らの高津宮址保存運動に対する批判など、初期の日本歴史地理学会が力を入れて行つた「偽遺跡」の洗い出しは、このような問題意識のもとに行われたといつていいだろう。彼らの「生硬」<sup>(25)</sup>とも評される地方の歴史研究、史蹟保存運動に対する厳しい視線は、「歴史地理」「郷土史研究」に対する多大な期待ゆゑのものであつた。

小林のいう「史料の何たるかを弁知せしむるの道」が『歴史地理』や夏期講演会として具現化されていったことはこれまでみてきた通りである。こうした活動の甲斐あつてか、『歴史地理』には、次第に吉川純三郎「能登半島の跋

渉」(二五一四)、丸山太一郎「下野足利郡毛野村大字大沼田の古石垣」(二七一三)等々、良質な調査報告が投稿されるようになる。吉川は新潟県高田中学校教諭、丸山は栃木県足利町在住で、後に「瓦全」の号で知られるようになる郷土史家である。丸山はまた、右の論稿で紹介した列石の調査を希望する者に、案内の便宜をはかることも申し出た(「栃木県足利町附近の列石につきて」(二七一三))。東京からの度重なる呼びかけに応じて、「地方」からも能動的な(史料)の収集と共有の動きが現れていった。

### 学問的討論の実演

右にみた日本歴史地理学会による「偽遺跡」批判に対しては、地域や在野の研究者からの激しい非難も寄せられた。例えば、木村一郎という人物は、自らが取り組んだ高津宮址の考証を否定されたことに憤り、喜田貞吉や吉田東伍に対して罵詈雑言に近い反論を寄せた(木村「研究会の諸氏に注意す」(三一二)<sup>26</sup>)。これに対し、『歴史地理』では、あえて木村の反論を掲載した上で、「編者曰く」として、「乞ふ安心して徒らに罵言するを止めよ、余輩の所論の不十分不完全不考証なりや否やは、乞ふ其所論を沈思再読せられよ」とたしなめている。

木村のように、「地方」の「郷土史研究」や史蹟保存活動に、学問的に認容し難い見解が絶えないのはなぜなのか。小林庄次郎は、その原因を「天下幾多の史蹟を己が郷里に定めんとする」「地方的感情」にあるとみていた。とともに、小林は、そこに一つのジレンマがあることも見抜いていた。というのも「さはれ又此の感情ありてこそ初て人々其郷里の史蹟発揚に熱沖するなれ」というように、人々を「郷土史研究」や史蹟保存活動に駆り立てる原動力となっているのもまた、この「地方的感情」に他ならないからである。学問的正確さに拘泥するあまり、その原動力を毀損してしまったのは元も子もない。それゆえ、課題は「己れ心に其偽を知れども事証を曲解して世人を瞞せんとする如き



陋を去らんこと」に求められた（以上、麻郷「史跡研究に対する地方的感情の弊」〔二二二〕）。

では、どのようにすればこの課題を克服することができるのか。そこに見出されたのが学問的対論の媒体としての『歴史地理』の意義である。「幸なるかな天下同好篤学の士多し」。しかし、「万人の諸見」は必ずしも一致しない。そこで、『歴史地理』を活用し、「同好篤学の士に、意見発表の機会を与ふる」ことで、衆目のうちにその決着をはかうというのである（麻郷「過去半歳の回顧と将来の希望と」〔二二一〕）。小林は「本誌は将来我が研究範囲に於て学者と実世間の媒介者たらんを冀ふ」との希望を述べている（同右）。

初期の『歴史地理』には、活発な議論を推奨しつつ、他方で、学問的議論の作法を説く論稿が散見される。例えば、「一種の私情の制する所となり所謂碩学先輩と見を異にするに当り。自己の説を発表するに躊躇せしは特に旧時史学界の陋習なり」として「自由討論の風」の重要性を述べるとともに（麻郷「明治三十三年の歴史地理界」〔三一〕）、「坊主悪けりや袈裟まで悪いといふのは、甚しい〔い〕げす根性と存候、人の学説などを駁撃する時は正々堂々の陣で、学説其もののにのみついて議論をすべきものと存候」「正々堂々の陣を張るには、調べた上にも調べて陣を張るべきものと存候」（「駄言録」〔六一二〕）と、議論から個人的な好悪や感情論を排すべきことを強調したようである。『歴史地理』の誌上で学問的議論を可視化することで、「地方」の人々の「郷土史研究」への意欲を損ねることなく、学問的価値観の浸透をはかる狙いがそこにはあったといえる。先述のように、木村の反論をあえて掲載したのも、議論を可視化することで、いずれの主張が学問的に正当であるかを、読者が能動的に判断できるよう仕向けるためであったと考えられる。

『歴史地理』を主な舞台に華々しく展開された神籠石論争や法隆寺再建非再建論争について、本稿では詳しく論じることができないが、これらの論争が、結果的に学問的価値観を共有するために有効な対論の実演となったことは指



摘できよう。法隆寺再建非再建論争においては、『歴史地理』の編集者と顧問の喜田貞吉とは見解を異にし、喜田に  
 対する激しい批判が『歴史地理』に掲載されることもあった。これについて「編輯局より」(七一八)は、編集局宛  
 に「編輯局より」を読めば局外者は編輯員と喜田顧問と感情の衝突ある様考ふる」「誌上にては中よく」してほしい  
 との来簡があったことを伝えた上で、「本会の顧問なる故、論難する能はず、發起人なる故非難する能はずとの事は  
 なき筈に御座候〔中略〕整々堂々、駁撃論難以て所説を戦はしめたまき意見〔中略〕何も感情の衝突ありたるにも御座  
 なく、同氏を非難したるにも御座なく、唯法隆寺建築論に対して芸術史家としての立脚点より答弁せる迄の事」と論  
 した。学問的議論はあくまで学問的見地のみに立脚して行われるべきであり、好みや人間関係、ましてや「地方的感  
 情」に左右されてはならない。数々の論争は、このような価値観の浸透を促し、そのことによって、蓄積・共有され  
 るべき知見や〈史料〉とは何であるかを、全国の会員が了解する機会を提供したと考えられる。幹部会員同士の盛ん  
 な論争は、結果的に、論争の舞台となった『歴史地理』の中立性を担保し、学問的信用を高める効果を発揮したとも  
 いえよう。

### 〈現代〉を見る目

このようにして「地方的感情の弊」を言いつつ、一方で、『歴史地理』において繰り返し強調されたのが、「史学は  
 死学」ではなく、「社界の発展及び国家の経営上必修の学」であるとの確信である(「歴史的智識の欠乏」(八一六)。政  
 治や徳育を排した「純正史学」というアカデミズム史学が内面化した立場からは、こうした主張は現われ難い。<sup>(26)</sup>これ  
 は日本歴史地理学会が多くの初等・中等教員を会員に抱えていたこと、時代別ではなく、地域別の問題設定に適した  
 歴史地理学を標榜したことからもたらされた特徴であると考えられる。以下、その具体像に迫りたい。

創立もない頃、小林庄次郎は歴史地理学界における「研究の偏古」を指摘し、その原因を「古代の事実は材料少くして研究に容易く且つ自由放恣なる見解を容れて一時の快を取るの余地ある」ためであると批判的に論じた（麻郷「明治三十三年の歴史地理界」〈三一—二〉）。『歴史地理』の古代史偏重は、先行研究も指摘するところである<sup>(30)</sup>。しかし、実際は、巻を重ねる中で、『歴史地理』には現代史に関わる論稿も掲載されるようになった。例えば、那珂通世「行政区の名称境界に関する私議」（五—一〇）は、日本歴史地理学会が主要なテーマに掲げた地名研究に関する論稿だが、この中で那珂は、地名の歴史の変遷を確認しつつ、明治以降の行政による恣意的な地名の変更・決定を批判している。これを受けて、吉田東伍も、那珂の議論を補訂しつつ、同様の観点から行政の施策を批判する論稿を著した（吉田「行政区の名称に就きて」〈五—二二〉）。『歴史地理』という時空間を捉える認識方法は、対象地域の通史の変遷を包括的に把握する思考と結びつきやすく、そのことが、現在の行政による施策を歴史的経緯を踏まえて相対化し、批判する姿勢を生み出したといえる。

このような姿勢は、ついには行政の利害と衝突することにもなった。喜田貞吉「歴史地理上より新陸軍管区を評して地方行政区に及ぶ」（二—一四—六）は、那珂や吉田の研究に刺激を受け、「歴史地理学上の見地より諸種の行政区画の沿革を論じて理想的地方行政区を私議せん」との企てをもって発表されたものだが、初篇を掲載した段階で学問の範囲を逸脱するとの「注意」が寄せられ、内容の変更を余儀なくされた（同右〈二—一五〉）。そもそも、地理的情報は軍事機密に関わることが多く、実地踏査の際に、官憲の取り締まりに遭うことも少なくなかったらしい。堀田璋左右はそのような行政の姿勢に「余輩の研究する所も亦国家の爲め」「徒に秘密の名を以て學術の妨害をなすが如きことあらばそは国家の爲め不忠の臣と云べし」と強気の批判を加えている（右京「歴史地理の研究に就て参謀本部の当事者に望む」〈二—二二〉）。

堀田にみられる果敢な姿勢は、この時期の日本歴史地理学会の基本的な態度であつたといえる。右の喜田の論稿をめぐる問題が生じた後、日本歴史地理学会は新たに保証金を納付し、『歴史地理』をこれまでの出版条例から新聞紙条例の適用下に移すことで、「政治教育宗教其他百般の時事に亘りて、自由なる言論を掲載し得る」環境を得ようとした(吻「本誌の俗的發展」(二二—三三))。その意図を喜田は次のように説明している。

余輩は、史家が常に純正史学を是れ事として、俗世間外に超然たるのみを以て、昭代の学界の慶事なりとは信ぜず。史家が同時に応用家を兼ね、史学研究の結果を活世界に應用して、政治に宗教に、或は教育に、其他各種の方面に史学上より得たる知識を活用し、以て俗世界に活動するは吾人の希望するところなり。殊に況や吾人の主とする歴史地理学の研究が、多くの点に於て現今の人事地理上の事項と密接の關係あるに於てをや

〈史料〉の収集・蓄積・共有を通じた「純正史学」の立ち上げを主要な目的として設立された日本歴史地理学会が、ここにおいて「史学研究の結果を活世界に應用」という独自の使命を見出したことが確認できる。

### 新領土と「世界」への関心

右の使命感は、地理的空間を捉える視座とも相まって、大日本帝国の新たな領土、新たな勢力圏への関心を生み出した。日本歴史地理学会の活動が活発に展開された一九〇〇—一〇年代、日本は日露戦争から韓国併合、第一次世界大戦を経てアジア・太平洋地域に勢力を拡大していった。規約では「本邦歴史地理の研究」を掲げた日本歴史地理学会だが、日本が膨張するにしたがい、その視野をアジア、さらには世界へと広げていった。

この傾向は日露戦争を間近に控えた一九〇三年には『歴史地理』誌上に現れる。五卷一〇号から「旅行日記」の

欄が新設されたことは先述したが、この欄に最初に掲載されたのは市村器堂「遊清訪古録」(五—一〇—一二、六一—三・四・六)で、東京帝大助教授・市村瓚次郎が官命で行った中国での史蹟踏査の報告だった。日露開戦直後の六卷三号では、会員に対し「夏期の休暇を利用し韓国に実地踏査を試むべきなり」との呼び掛けも行われる(海風「大に韓国を踏査せよ」)。

日露戦争とともに、研究対象の地理的広がりには「従来、局東の一局部に限られたる研究範囲の俄かに勃興して、世界各国、至る所吾人の研究の陰影を見ざるは、なきに至れる」ほどとなり、特に「満州及び韓半島の歴史地理に関する事項の研究は頗る多かりし」と総括された(けふ子「過去一年の回顧」(七一—一〇)。戦局の帰趨が定まった頃には喜田貞吉が官命で旅順に出張し(編輯局より)(七一・六・八)、講和条約調印後は、堀田璋左右と深沢鑣吉が東京帝大の委嘱で奉天へ(堀田深澤両君等の奉天行を送る)(七一—一〇)、大森金五郎が樺太へ(「本会記事」(一一〇—一二))と幹部会員自ら占領地や新領土に赴いた。彼らは現地での見聞をまとめ、深沢鑣吉「予の見たる奉天城」(八一—二)、同「統満洲土産」(八一—三・四)、大森金五郎「樺太行」(一一〇—三・五・六)、同「北海道及び樺太島」(一二〇—四)等の形で『歴史地理』誌上で詳細に報告した。

日露開戦の直前、『歴史地理』は論説で「歴史地理学をして学問上の位置体系を明にし及びその研究法を進め、秩序整然たる一学科たらしめん事を期し、その引証立例は狭隘なる我が国史にのみ求めず、更に進んで世界何れの部分にも及ぶ所あらんとす」(歳首に際して本会の希望を述べ)(六一—一〇)との見透しを示した。研究対象の地理的拡大は、日本の対外的膨張という現実に引きずられたものではあったが、それは、同時に「歴史地理学」を「秩序整然たる一学科たらしめ」るための契機としても認識されたのである。

その際、あわせて「もし必ずや研究者の実地踏査のみを憑拠とせんには、それ何時の世か、歴史地理学研究は範囲

を拡張し国史地理学を越へ、さらに世界歴史地理学の研究をなし、従ひては歴史地理学の理論的、はた体系的研究成果を得んや、されば研究者は、信用すべき他人の実地踏査或は正確なる報告に依て、斯学の基本的研究をなすにあらずば、到底大成の域に達するを得ざる也」(「過ぎにし一年の歴史地理界」(六―一)とも述べられたように、「歴史地理学」が「世界」を対象に収めた学問として「大成の域に達する」ためには、「信用すべき他人の実地踏査或は正確なる報告」が、より一層必要とされた。そのため『歴史地理』は第六巻から再び誌面改革を行い、「一には斯学普及の爲め平易を旨とし、一には資料を広く一般史学に求むる事を勉め」て、より多くの「信用すべき」研究協力者を獲得しようとしたのである(前掲「歳首に際して本会の希望を述べ」<sup>32)</sup>。

「理論的、はた体系的研究」を目指しながら、「一般史学」にも誌面を開放したのは、一見矛盾するようでもあり、事実、この方針が招いた、良くいえば包括的、悪くいえば方法的曖昧さが日本歴史地理学会の学問史上の評価を限定的なものにしているともいえる<sup>(33)</sup>。ただ、その背景には「今は歴史地理学の基本的研究の時代」(前掲「過ぎにし一年の歴史地理界」)との自己認識が働いていた。歴史地理学の「大成」のため、協力者を増やして正確な知識をより多く蓄積することがまずもって優先されたのである。

このように帝国の膨張と学問の確立とを自然に重ね合わせる姿勢は、「史学は死学にあらず」という前述の意識と表裏をなした。大日本帝国の膨張が「世界歴史地理学」への道を拓いたならば、「一時の凶器」たる戦争の後、その勝利を確実なものとするのは「歴史地理学」の役目である。多大な犠牲を生んだ旅順の戦いの後、『歴史地理』は「我が歴史地理学は決して死学にあらず、之を活用すべき時期今や到達せる也」と高らかに宣言した(「旅順の陥落と満洲の研究」(七―一)〇)。それはまた、「兵に勝ちて、学に敗する、国耻何物か此れに過ぎん」との自尊心をも呼び起こし、具体的には、「満韓研究は帝国学者其の開拓の使命を有す」との決意となつて現れた(「渤海史の研究」(八―四)〇)。

「満韓各地の我が新勢力範囲の如きは、必ずや実地踏査に依て其史料の不備を補はざるべからざる也」(「夏期休業を迎ふ」(八一七))とされ、知識の上からも、新たな勢力圏を我が物とすることが目指された。

対象地域の広がりには、大日本帝国の勢力範囲にとどまらなかった。一九〇四年から足掛け三年にわたり断続的に連載された村上直次郎「外交史料採訪録」(六一六、九、一二、七一、八一二)は、村上がスペイン・ポルトガルで行った日欧関係史料の調査日記である。後に、第一次世界大戦が勃発すると、坂口昂「エルザス・ロートリンゲン問題」(二三四)等、ヨーロッパの関連地域についての論稿も掲載される。日本の植民地帝国化と、国際的地位の向上が、このような広く「世界」を見渡す姿勢をもたらしたといえる。

以上、ここまで日本歴史地理学会の活動概要を辿ってきた。それでは、以上のような活動は個々の歴史研究者の学問的実践にいかなる影響をもたらしただろうか。次節では同会の設立以来、その死に至るまで中心的メンバーとして活動した吉田東伍に注目し、この点を掘り下げたい。

※本稿はJSDS科研費(16K16914、及び19K13347)による成果の一部である。

## 註

- (1) 児玉幸多「地方史研究の回顧と展望」(『地方史研究』二二、一九六一年)、齋藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』(法政大学出版局、二〇一五年)第二章等。齋藤は同会が史蹟の「由緒的価値」を重視する「世

- 人」の論理に対し、「学術的価値」を重視する「学者」の論理を対置したとする(同右、八三頁)。
- (2) 花森重行「歴史地理学という場の崩壊——柳田国男・高木敏雄の久米邦武批判から見えるもの」(『日本思想史研究会会報』二〇、二〇〇三年)。

- (3) 川合一郎『近代日本の歴史地理学——二つの系譜』(古今書院、二〇二〇年) 特に第一章。
- (4) 拙稿「一八九〇年代のアカデミズム史学——自立化への模索」(松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』山川出版社、二〇一五年)。
- (5) もちろん、川合一郎が指摘するように、「歴史地理とは何ぞや」(『歴史地理』二一九、一九〇〇年)で創立当初の同会に学問的指針を与えた帝大教授・坪井九馬三をはじめ、同会に歴史地理学の自立性を主張した論者が存在したことも無視できない(前掲川合第一章)。ただし、彼らにあっては歴史地理学が歴史学の「補助学」として機能することは自明のことであった。
- (6) 川合一郎は日本歴史地理学会における吉田の位置を「東京帝国大学関係者」「郷土誌(史)家」と並ぶ「在野の地誌学者」と規定している(前掲川合二八四頁)。吉田については、さしあたり佐藤能丸「吉田東伍」(永原慶二・鹿野政直編『日本の歴史家』日本評論社、一九七六年)、千田稔『地名の巨人吉田東伍——大日本地名辞書の誕生』(角川書店、二〇〇三年)、前掲川合第四章を参照。
- (7) 日本歴史地理学会の創立経緯と活動の概要については「歴史地理百号史」(一一一一)、岡部精一「日本歴史地理学会十年史」(一四一一)、喜田貞吉「本会三十年の回顧」(五四一六)、大森金五郎「本会の回顧」(五四一六)、堀田璋左右「本会に関する懐旧談」等、当事者による総括と回顧があり、前掲川合が詳細に検討している他、前掲齋藤(六八一六九頁)でもまとめられている。本節で扱う事実関係のうち、注記のないものは、これらの文献によるものである。
- (8) ただし、『歴史地理』の発行元は一定せず、一九二〇年代初頭までの間に六盟館、吉川半七、研究会直営、青木嵩山堂、三省堂、仁友社、三星社書店と変転した。
- (9) 「日本歴史地理研究会々員名簿」(二二三)。
- (10) ルートヴィヒ・リース「史学会雑誌編纂二付テ意見」『史学会雑誌』五号(二八九〇年)五七七頁。
- (11) 一八八八年のルートヴィヒ・リース意見書(『東京帝国大学五十年史』上、一九三二年、一二九九―一三〇二頁)。
- (12) これら「地方史学会」については『奥羽史学会会報』(二八九五―一八九六年)、『北陸史談会々報』(一八九六年)、『九州史談会報』(二八九七―一八九八年)を参照。
- (13) 「地方史家」『史学雑誌』九編二号(一八九八年)、「地方における史学界」『史学雑誌』十編二号(一八九九年)。
- (14) 「奥羽史学会」(前掲『史学雑誌』九一一)。
- (15) 一八九五年に五高に入学した小林と藤田は、同年、赴任した武藤虎太のもとで史料探訪を行ったり、請うて日本文学史の課外講義を受けるなどの研鑽を積んだ。その活動の中で結成されたのが九州史談会であり、会報の編纂と庶務は藤田が担当したという。九州史談会の会員の中には、彼らの一年以上級で日本歴史地理研究会の発起人に名を連ねた



栗田淳綱や、幹事をつとめた松崎求己（一九〇三年国史科卒）もいた。武藤によれば小林・藤田の学年が卒業すると、九州史談会の活動も窮境に陥ることになったという（「藤田明君追悼録」〔二七—二〕収録の武藤虎太、柴謙太郎、浜田廉、松崎求己の文章による）。

- (16) 例えば、「夏期休業を迎ふ」（八一七）は、学生に向けて「其教課によりて得たる智識、机上の読書によりて獲たる史実等を、実地の踏査によりて更に実物的研究を重ねるが如きは此の自由の長日子を除きて何処に求めんや」とし、「仮令必ずしも事々しく実地踏査の研究をなすにあらず、単に地方を歴遊して其一般地理形勢の概念を得たるのみにしても、他日書を読むの際、其歴史事実を了解するに於て思半に過ぐるものならん」と述べて、休業中の旅行を勧めている。

- (17) 前掲浜田。  
 (18) 同右。  
 (19) 右京は堀田璋左右の筆名。  
 (20) 青眠は花見朔己の筆名。  
 (21) 『歴史地理』には「夏期講習会」「夏期講演会」と二通りの呼称がみえるが、本稿は夏期講演会で統一する。  
 (22) 以下、第一回夏期講演会については、特に断らない限り「日本歴史地理学会主催鎌倉講演会記事」（二二—三）による。

- (23) 大森金五郎によれば、後日、乃木希典に面会した際、「先

日山県公に面会したところが、小田原の講演の話が出て、学者も面白い事をやる、あゝ、いふ風に実地に臨んで地理や歴史を説いたならば、それこそ善くわかる事であらうといはれた」と伝えられたという。この頃、大森は学習院の教授、乃木は院長を務めていた。

- (24) 前掲齋藤七九〜八二頁。  
 (25) 同右八四頁。  
 (26) 木村は伊勢山田の出身で、小学校訓導をつとめていたが、「宮址の調査に寝食を忘れ、為に職を棄て家庭を失ひ、終に病を獲て根岸病院に入る」ことになったという人物である（「木村一郎氏逝く」〔二八—四〕）。木村については前掲齋藤七八、八七頁。

- (27) これらの論争についてはさしあたり前掲川合（三七〜四〇頁）を参照。  
 (28) 前掲拙稿等参照。  
 (29) 創刊当初から『歴史地理』には教員に向けた論説が度々掲載された。それは、例えば喜田貞吉が「蓋し国民の愛国心を養成するは国史の知識を普及せしむるよりよきはなく、郷土を愛するの心を養ふは其地の来歴を知悉せしむるよりよきはなし、〔中略〕忠臣は孝子の門に出で愛国者は郷里を愛する人士の中に求むべし」と説いたように（「呦」は喜田の筆名）、往々にして、児童の愛国心養成のために歴史を「応用」することを勧める内容となった。ただ、



その際にも喜田は「地方の志を修むるもの亦其地方の古伝と実地にのみ依頼し、限界を広くして他と比較研究する事なくんば所論往々固陋頑迷に陥り、誤謬の断案を下して、為に子弟を誤まり、引ては郷土に固執して他を排するが如き念を養成するなさを保せず」（同右）と釘をさすことも忘れてはいない。

（30）前掲花森。

（31）具体的には、「地理」欄及び先述の「談叢」欄の新設が挙げられる。特に「談叢」は、毎号、付録として掲載された「通俗史談」とあわせて、「学校の教材又は家庭の談叢其他実地踏査に付随する奇談等を載せ、又繙読の間に倦怠なからしむるやうの方針」から設けられたものだった（前掲「歴史地理百号史」）。

（32）前掲川合。